

第3章 ノルウェーのサーミ・メディアの現状と利用状況

小内 純子 | 札幌学院大学社会情報学部教授

第1節 はじめに

本研究チームは2012年度から4か年の計画で、北欧の先住民族・サーミと日本の先住民族・アイヌのおかれている状況に関する比較研究に着手している。研究チームにおいて筆者が担当するのは両地域における先住民族メディアに関する比較研究である。これまでにサーミのメディアに関してはスウェーデンを、アイヌのメディアに関しては新ひだか町と伊達市を、それぞれ取り上げ検討してきた（小内 2013a, 2013b, 2014）。今回とりあげるのはノルウェーのサーミ・メディアについてである。

サーミの居住地は、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドの北部からロシアのコラ（Kola）半島にかけて広く分布している。サーミの人々の間ではそこにサーミ共同体の構築を目指す動きがあり、「この過程でメディアは中心的な役割を果たしてきた」（Pietikäinen 2008:199）と評価されている。とくにラジオ放送を通じて情報を共有することは、先住民族としてのアイデンティティの形成にとって大きな役割を果たしてきた。しかし、その一方で、サーミの居住地は、それぞれ国境で分断されており、サーミ・メディアはそれが属する国のメディア政策や制度の枠内で活動せざるを得ず、かつ各国の経済力の影響も避けられない状況にある。このことは、各国のサーミ・メディアは、国境を越えたサーミ共同体レベルの動きと密接に連動しながら、相対的に独立して活動を開いている、あるいは展開せざるを得ないことを意味している。この点は、サーミ・メディアのあり方に様々な影響を及ぼすことになる。実際、スウェーデンのサーミ・メディアに関する調査からは、北欧3国間の足並みが必ずしも揃っているとはいえない状況も垣間見られた（小内 2013a）。

本稿が対象とするノルウェーは、経済力においてもサーミの人数においても、北欧3国で飛び抜けた存在であり、メディアの分野でも全体をリードする立場にある。したがって、本稿はノルウェー国内のサーミ・メディアの分析が中心になるが、できる限り他の国のサーミ・メディアとの関連に留意しつつ考察を進める。以下では、まず、ノルウェーのサーミ・メディアの形成過程と現状について把握し、そのうえでサーミの人々のメディア利用状況と情報発信について見ていく。

第2節 ノルウェーにおけるサーミ・メディアの歴史

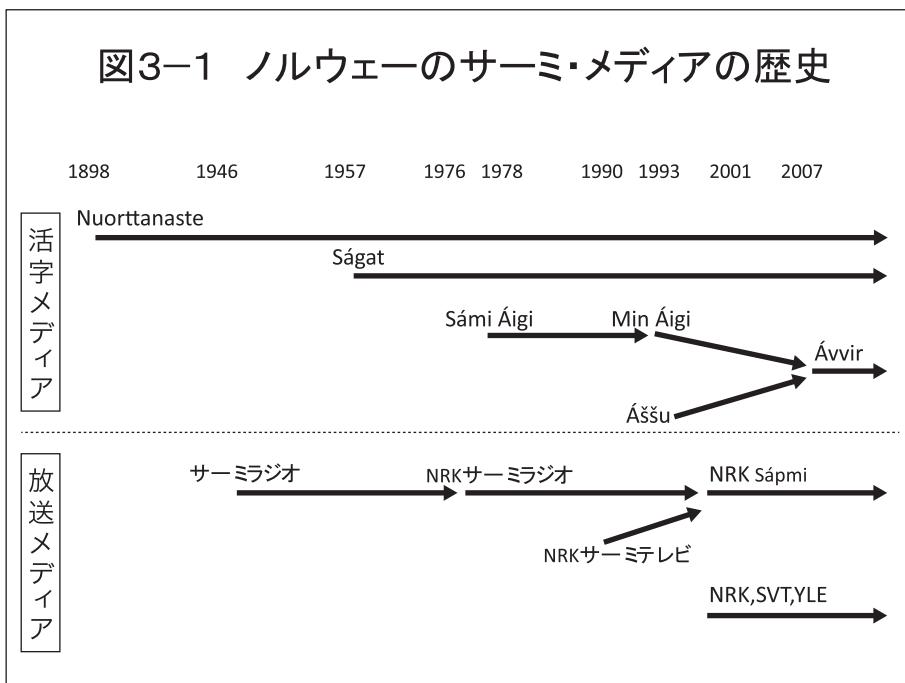
第1項 活字メディアの歴史

まず、サーミ・メディアの歴史について概観しておきたい。図3-1はノルウェーのサーミ・メディアの歴史を図示したものである。

ノルウェーでは1800年代半ば以降、サーミに対する同化政策が進められていた。サーミ語は次第に学校教育から排除されるようになり、1889年には学校の授業はノルウェー語で行われることが決定され、1905年にはそれまで補助語として使用されていたサーミ語も禁止されてしまう。こ

のような同化政策への抵抗として1873年にはサーミ新聞が発行されるが、1875年には早くも廃刊となっている。その他にも1900年頃3紙ほどサーミ語の新聞が発行されているが、いずれもすぐに消えている。そのようななかで唯一1898年に発行された冊子“Nuorttanaste (The East Star)”が、キリスト教ルーテル教会の支援を得て継続していく。これは現在も発行されており、サーミ語の出版物としては最古のものといわれる。

第2次世界大戦後、サーミ語が復権するようになり、1957年に“Ságat (News)”という新聞が誕生している。当初はサーミ語とノルウェー語で書かれた新聞で、最初はヴァドソー (Vadsø) から発行され、1981年にはラクセルブに移っている。これも現在まで続いている。



1978年に“Sámi Áigi (The Sámi Time)”という新聞が創刊された。発行したのは、サーミ語を守る政治的組織でサーミ議会の政党の1つNSR(=Norwegian Sámi Association)であった。その後、1993年ごろ“Min Áigi (Our Time)”が創刊され“Sámi Áigi”はそこに引き継がれる。同じ政党が再建したもので、カラショーケから発行された。一方、1993年にカウトケイノで“Áššu (Glow)”という新しい新聞がスタートした。トナカイを飼っている団体の政党NRL(トナカイ組合)が発行した新聞である。“Min Áigi”と“Áššu”はそれぞれ週に2,3回発行されていたが、購読者から日刊紙がほしいという声が強まり、2007年に2紙が合併して日刊紙“Ávvir”が誕生する。北サーミ語の新聞でカラショーケに本社が置かれた。

第2項 放送メディアの歴史

最初のサーミ語のラジオ放送は1939年のクリスマスイブに教会からミサを流したものであった。1週間に1回20分間という定期放送が始まったのは1946年のことで、トロムソからであった。1965年にスウェーデン北部、1966年にフィンランド北部でも放送されるようになり、これが北欧のサーミラジオの協力体制のさきがけとなる。放送は当初北サーミ語で行われたが、1973年に南サーミ語、1975年にルレ・サーミ語の放送が開始されている。

1976年、サーミ語の番組制作はカラショーケへ移動し、この年、サーミラジオは公共放送のNRKの1部門になる。1984年NRKサーミラジオはカラショーケに独自の放送局を持つようになり、翌年、現在の最高責任者ニルス氏（Nils Johan Heatta）がその地位に就く。

サーミ語のテレビ放送がスタートしたのは1990年である。1992年にはNRKサーミラジオはNRKの1部門として独立し、全国放送で独自の番組枠をもつようになる。1999年にサーミラジオはデジタル放送（DAB）を開始し、1999年にネット新聞を設立している。2001年にはNRKとSVTが協力して10分間のテレビのニュース番組を開始し、2002年にYLEも参加し北欧3国で共同放送を行うようになる。放送時間は、2003年に15分へ拡大している。2010年まではNRKサーミラジオという名称が用いられていたが、メディアが多様化し実態に合わなくなってきたので、NRK Sápmiへ名称が変更されている¹⁾。

このようにノルウェーでも、スウェーデンと同様に、サーミラジオもサーミテレビも公共放送の1部門として成長してきており、その過程で北欧3国の協力関係が模索されてきたことがわかる。後述するように、ラジオでもテレビでもサーミ語による番組が放送されており、その制作もサーミ自身によって行われていることから、主流メディアの枠内にあるとはいえる“広義の先住民族メディア”とみることができる（伊藤・八幡 2004:3）。以下では、現在存在している活字メディアと放送メディアについて、その形成過程と現状を見ていく。

第3節 活字メディアの形成と現状

第1項 宗教冊子 “Nuorttanaste”

ノルウェーで最も長い歴史をもつ活字メディアが“Nuorttanaste（東の星）”である。当時サーミには自分の言葉で書かれた冊子がなかったため、その必要性を感じたキリスト教ルーテル教会の牧師が発行を始めた。ルーテル教会が財政的な援助をしており、現在までサーミ語で出版されている。宗教色が強いので、新聞という範疇には含まれず、宗教的冊子とみなされている（写真1）。

冊子は、1年間に11回発行されている。基本的に月刊だが、夏のバカンス時期は発行していない。部数は550部である。全12頁で、表紙と裏表紙のみがカラー刷りとなっており、色的には地味な新聞である。現在の編集者によるとあまりお金を掛けないやり方だから続いてきた面があるという。購読料は1年250NOKと低額である。現在は、サーミ議会から助成金を得ている。以前は国の文化省から助成金がきていたが、いまはサーミ議会を経由して受けている。2013年の助成金は930,000NOK（約1,600万円）である。読者からは年250NOKの購読料のほか、寄付を受けることもある。したがって、助成金と購読料と寄付金で成り立っているが、やはり助成金の比率が高い。1988年までは1,100部を無料で配布し、お金のある人は支払って下さいというやり方



写真1 “Nuorttanaste”

だったが、国が誰が購読しているか名簿が必要と言ってきたためいまのかたちになった。その時から発行部数は 550 部である。

2013 年までの 115 年間に 7 人の編集長が交替している。以前は伝道師や牧師が作っており、編集は仕事ではなかったが、いまは仕事として行われている。現在、編集に関わる者は 3 人で、うち 2 人がそれぞれ 50% 働き、もう 1 人が 30% 働いている。50% 働くとは 1 週間に 2 日半、30% は 1 週間に 1 日半働くことを意味し、北欧ではよくある就労スタイルである。印刷は同じ建物内にある Ávvir 社に委託している。この冊子の特徴は、115 年の間、一時期を除きサーミ語で発行を続けてきたことである。いろいろ難しいことがあって 1 年に 1 回という時もあり、2 頁、4 頁という時もあったがそれでも続けてきた。サーミ語使用が禁止された第 2 次世界大戦の一時期だけノルウェー語になったことがあるが、戦後すぐにはサーミ語に戻している。当初は、他に新聞がなかったので様々な事柄について書かれていたが、現在は他に新聞が発行されるようになったのでキリスト教の説教など宗教的な記事が増えてきている。説教などは、編集者だけではなく一般の人にも書いてもらっている。また長く続いているので古い写真をたくさん所有しており、毎月のように古い写真が新聞に掲載されて喜ばれている。何を書くかも読者の反応をみて決める。読者が興味をもっていることを書くようにしており、賛美歌が好きな人も多いので賛美歌について書くのも喜ばれる。青年のため、子どものための頁もある。この冊子を読んでいる人はキリスト教の内容を読みたい人だからキリスト教の内容がないと文句が出てくる。普通の文化的なことは他の雑誌にもあるから、この冊子の読者は宗教的な内容がないと満足しない。宗教の繋がりが強いから 115 年間も続けることができたともいえる。

第 2 項 日刊新聞 “Ságat”

(1) “Ságat” と “Ávvir” の関係

“Ságat” は、「ニュース」という意味で、会社は 1956 年に設立され、1957 年に新聞が創刊された。発行を始めた頃はノルウェー語とサーミ語の両方を使っていた。ノルウェーでは 1905 年から 1945 年までサーミ語は禁止されており、サーミ語が広く使われるようになるのは第 2 次世界大戦後の 1960、70 年代である。したがって、サーミでありながらサーミ語を読めない人がいたため 2 つの言語を使用して新聞を発行した。その後 1978 年に “Sámi Áigi” というサーミ語の新聞ができたのを契機に “Ságat” はサーミ語をやめてノルウェー語のみで発行するようになった。“Sámi Áigi” は現在の “Ávvir” に繋がる新聞である（前掲図 3-1 参照）。サーミ語の新聞が 2 つあると読者を奪い合うことになるので、“Ságat” はノルウェー語しかできないサーミの人たちのための新聞にしようと考えた。国は、サーミの新聞は 1 つでいいと言ったが、サーミ語とノルウェー語の新聞があることがいかに重要かを主張して国に理解してもらった。サーミの文化のために 1 番いいのは両方あることだと主張した。

実際、“Ávvir” は北サーミ語で書かれているので、他のサーミ語方言を使用する人は写真を見るだけでまったく読めない。“Ságat” は、共通語としてのノルウェー語で書かれているので読むことができる。政府も “Ságat” を読めばサーミの社会で何が起こっているかわかる。“Ságat” の記事をもとに国会で話し合われることもある。“Ságat” はサーミのためだけではなく、主流社会からのアクセスも可能な新聞であり、ノルウェー人に対してもアピールできる新聞である。その点に存

在意義がある。

“Ávvir”はライバルではなく、一緒に仕事をしている仲間と思っている。「サーミ出版社協会」という組織がありそこで一緒に活動している。「サーミ出版社協会」として国に対して“Ávvir”と“Ságat”的代表が補助金を申請している。2つの新聞社で写真の共有も行われている。

(2) 会社の概要

“Ságat”は、株式会社 Samisk avis 社が所有している。Samisk avis 社は、北ノルウェーの 51 のコムューンが株の 47% を、サーミ文化団体が株の 10% を所有しており、残りの 43% は約 600 の「その他株主」によって所有されている (Solbakk 2006:133)。

本社は、1981 年にヴァドソー (Vadsø) からラクセルブに移った。地方局は、ターナ、カラショーグ、トロムソ、エーベネス、オスロにあり、カウトケイノにはない。カラショーグ地方局は、町の中心部にあり、オフィスは 100m² くらいで 4 年前に建てられた。従業員は地方局のスタッフも入れて約 30 人で、男女は半々である。記者には女性は 3 人しかいないが、ほかの部署は女性が多い。地方局は、ターナに 2 人、カラショーグに 2 人、トロムソに 1 人、エーベネスに 1 人、オスロに 1 人のスタッフがいる。残りの 23 人ほどがラクセルブで働いており、その内訳は、ジャーナリスト 3 人、調査担当 1 人、編集者 3 人、グラフィック 4 人、営業、配送がそれぞれ 1, 2 人、印刷 4 人などである。印刷部門は別会社となっている。

発行部数は 2,882 部である。印刷機を新しくして総ページ数 32 ページ、うち 12 ページをカラーにすることは可能であるが、2013 年 12 月 16 日付けの “Ságat” 紙 (写真 2) の総ページ数は 24 ページ、うち 12 ページがカラーになっている。次の日に配達するためには午後 3 時半までに印刷する必要がある。週 5 日の発行で、印刷は月曜日から金曜日、配達は火曜日から土曜日になっている。配達は郵便を使っており、配達にコストがかかる。購読料は年間 1,750 NOK で、ノルウェー南部になると郵便料金が高くなるのでもう少し高い。お店で買う場合は 1 部 25 NOK で、宅配の方が安くなる。お店で買う人は、部数では全体の 10% だけど、購読料では全体の 25% くらいを占める。だから毎日お店で買ってくれた方が会社的には儲かる。ネット新聞は毎号 4,000 から 1 万のアクセスがある。ネット新聞は無料だが、すべての記事が読める訳ではなく、読める部分はやや少ない。

放送関係の NRK Sápmi との間で正式な協力体制はない。手元にない写真を送ってくれたり送ったりというインフォーマルな関係はあるが、協力協定のようなものは結んでいない。

(3) 読者と編集方針

読者のほとんどがサーミの人である。1 番読者が多いのは、カラショーグ周辺、2 番目はターナとネスビーで、3 番目が海沿いの人たちである。フィンマルク県の読者が全体の 75%、フィンマルク県以外は 25% くらいである。カウトケイノは “Ávvir” の読者の方が多いということである。正式な発行部数は 2,882 部であるが、サーミは家族が多いので、1 部につき 5.4 人が読んでおり、その他にまわし読みもあるので、各版 2 万人くらいが読んでいると考えている。数字的にはノルウェーに暮らすサーミの約 3 分の 1 が読んでいることになる。記事には、サーミ地域とサーミの人が興味があることはなんでも取り上げる。サーミの暮らす地域には鉱山がある。カウトケイノなど北の地域では鉱山に対する反対運動がすごく強い。しかし、地域によっては鉱山会社を望むところもある。仕事をつくらなければ若い人がよそへ出ていき老人ばかりになってしまうという不安を抱えた地域である。そのため新聞には、賛成派と反対派の両方の意見を掲載することを心掛けている。

むしろ鉱山が必要という地域の人たちの声を載せて助けてあげたい。そこに住んでいる人たちがいいことだと思うならやるべきだと考える。サーミが半数を超える地域は、サーミの意見が通りやすいから問題はないが、サーミがマイノリティの地域では、サーミの意見がなかなか通らない。そういう地域に関しては、サーミの声を聞いてもらうために、時に強い調子の記事を書く。サーミがマイノリティの地域では、サーミの意見をマジョリティの人に聞かせる必要がある。その手助けをするのが新聞の役割と考えている。

(4) 財政基盤

財政的にはやはり政府からの補助金に頼る面が大きい。補助金 1,000NOK (約 1 億 7,000 万円) が収入の約 60% を占め、残りの約 40% (約 600NOK) は広告料と購読料で成り立っている。国からの補助金がなかったら、新聞の発行は絶対に無理であるという。サーミの新聞が補助金を獲得することができたのは 1987 年のこと、それまではずっと経済的な問題を抱えていた。補助金の額は、最初はあまり大きくなかったが、だんだん増えてきており、2014 年は新聞全体として 2,400 万 NOK (約 4 億円) を得ている。このうち “Ságat” が 1,000 万 NOK、“Ávvir” が 1,300 万 NOK、南サーミ語とルレ・サーミ語で記事をそれぞれ掲載している 2 つのローカル新聞に 2 % (48 万 NOK) ずつ配分している。ノルウェーではサーミ語の記事を掲載した場合、その記事の分量に応じて補助金が支給されることになっており、これらのローカル新聞は、週に 1、2 回サーミ語の記事を掲載している。

(5) 現在の課題

現在の課題としては次の 3 点が指摘された。

最大の課題は財政問題である。新聞発行は政府の補助金なしにはできないので、政府の方針に影響を受ける。政権が変わるとサーミに対する考え方も変わり、それが補助金額を左右することになる。ちょうどわれわれが調査へ行った時期は、2013 年 9 月に行われた国政選挙で、中道右派政党が過半数の議席を獲得し、労働党連立政権から中道右派連立政権へ移行した時期であった。中道右



写真 2 “Ságat”



写真 3 “Ávvir”

派連立政権は、保守党、進歩党、自由党、キリスト教民主党で構成されるが、このうち進歩党は、「サーミに特権を与えるのはよくない」と主張している政党である。そのため今後の補助金についてはどうなるかと不安だったが、今回は全員一致で無事にサーミに関する予算が可決された。とはいっても、今後に対してはなんの保障もなく、つねに不安定な要素を抱えている状況にある。たとえば、政府は消費税のような税金を新聞にも掛けようとしている。もしそうなると収入の8%くらいを国に納めなければならなくなる。このように政府の政策が経営に与える影響は大きい。広い地域をカバーするためには、交通費や郵送費がかかるため財政基盤の安定化は重要である。

課題の2つ目は、クオリティの高い新聞を発行する努力を続けることである。われわれのインタビューに応じてくれた編集長は、「機材、機械、技術の発展に遅れないようにし、記事の質もあげていきたい」と答えている。「現在も質の高いものを発行しているつもりだが、これからも質の改善をしていく。それがこの新聞の存在意義を高め、簡単に潰されない状況を作り出すことになる。」と述べており、第1の課題に対する対策の1つとして新聞の質向上が掲げられている。

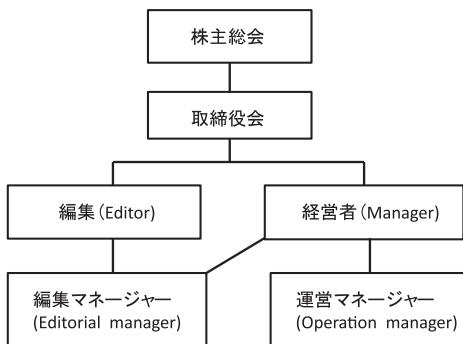
3つ目は、民主主義をサーミのなかで守っていくことという課題がある。そのためには、サーミがマイノリティの地域において、新聞がサーミの声を強く発信することを続けていきたい。また、国や地方自治体はもとより、サーミ議会に対しても批判するところは批判していくことも重要である。権力を監視する必要がある。誰かが反対意見を主張しないときちんと考えてもらえない。新聞がその役割を担う必要がある。

第3項 日刊新聞 “Ávvir”

(1) 会社の概要

先に見たように “Ávvir” は、“Min Áigi” と “Áššu” が合併し、2007年にスタートした北サーミ語の新聞である。新聞を発行する目的は、サーミ語で自由と独立の新聞を出すことにあった。Ávvir を発行している新聞社は、Sami Avisa 株式会社で、株は、Finnmark Dagblad と Altaposten という2つの全国区のメディア系の会社がそれぞれ3分の1ずつ、「その他の株主」が3分の1ずつ所有している。「その他の株主」では NRL = トナカイ組合が11%、Indre Finnmark Invest という投資会社が11%、その他個人が10%という割合である²⁾。“Ságat” とは株主構成が大きく異なる。

図3-2 企業経営の仕組み(Governance)



資料：Ávvir社提供資料より作成

図3－2は企業経営の仕組み（Governance）を示したものである。ノルウェーでは、メディア系の会社の場合、実質的なリーダーが2人いるのが普通である。1人は経営者（Manager）と1人は編集長（Editor）で、両者は対等な立場にあるという。経営者は銀行取引関係、経理、営業など経営に関わることすべてを担当し、編集長は紙面の内容を決める。経営者はもとより、役員会や株主も編集に口を出すことは絶対にできないし、してはならない。ノルウェーには“Law of editorial freedom in the media”という法律があり、メディアにおける編集の自由が保障されている³⁾。役員会や株主が口を出すのは経営面だけに限定されている。ノルウェーの場合、大きな会社はほほこのような体制になっているという。“表現の自由”を大事にする姿勢がよく表れている。この点は多くの補助金を得て運営されているサーミ・メディアにとってきわめて重要な点である。

（2）発行部数と読者

“Ávvir”の発行部数は1,100部、総ページ数16ページで全ページカラーである（写真3）。発行部数、総ページ数ともに“Ságat”より少ない。購読料は1部20NOKで、1年契約の場合は1,000NOKで、ノルウェーの一般新聞の半分くらいの値段である。“Ságat”に比べても安く、誰でも新聞を取ることができる価格設定にしているという。多くは宅配で、郵便局を通じて配達される。印刷するところはハンメルフェストというカラショーケから200kmくらい離れている場所にある。インターネット新聞の発行も行っている。

発行部数は1,100部であるが購読者は3,500人であるという。1部平均3.2人が読むという計算である。購読者の地域的分布は、サーミの中心地域（フィンマルク県）が55%、トロムソ県とヌールラン県がそれぞれ20%、オスロ市が3.5%となっている。また、紙媒体の新聞を1番よく読むのは30歳以上の女性であるという。インタビューに応じてくれた経営者は、「この地域の男性は体を使って働き、女性は大学へ行くという傾向がある。」と述べている。新聞読者の中心が30歳以上の女性という点も、この発言と重ね合わせると理解できる。

（3）従業員構成

“Ávvir”本社の従業員は約20人で、そのうち実際に新聞をつくるために編集長（Editor）のもとで編集マネージャーを中心に13人が働いている。残りは運営マネージャーの下にある。労働者を統括するのは経営者の責任で、給料に対する不満も経営者にくる。また、レイアウトや印刷など仕上げ作業も経営者の責任で行っており、編集の仕事が自由に進むように、周辺の仕事は経営者が担当する仕組みになっている。本社はカラショーケにあるが、その他にカウトケイノとアルタに支社があり、それぞれ6人と2人のスタッフがいる。2014年1月にはトロムソに事務所を開設する予定である。

“Ávvir”的スタッフは全員サーミの人で、ほとんど専門の教育を受けている。カウトケイノの大学を卒業したり、他のノルウェーの大学でジャーナリストの勉強をしたりしてこちらに帰ってきた人たちである。スタッフの年齢幅は23～50歳で、30～40歳が中心、20代は1人だけである。男女比は、男3人で、残り17人は女性である。大学へ行くのは主にこの辺では女性が多く、カウトケイノやカラショーケではそういう傾向が見られるため結果としてこうした構成になっている。

（4）財政基盤

財政については、国からの補助金が1,300万NOK（約2億2000万円）で全体の82.3%、購読料が110万NOKで6.9%、広告料が170万NOKで10.8%である。補助金への依存度は“Ságat”よ

りもさらに高い。政府の補助金がないとサーミの新聞は成り立たないことがよくわかる。サーミ人口は多くはないし、エリアも広いので取材するにも、輸送するにもコストがかかるからである。支出は、人件費が50%、制作費が19%、その他が31%となっている。

(5) 現在の課題

現在かかる課題として次の点が指摘された。

まず、第1にサーミ語ができるジャーナリストが足りないという問題がある。サーミ語で記事が書ける人が必要とされている。以前はトロムソにサーミ語で記事を書ける人がいたので事務所があったが、その人がいなくなって一旦閉じた。今回いい人が見つかったのでまた再開することになったという。事務所の開閉にジャーナリストの有無がじかに影響していることがわかる。その背景には、サーミ語ができるジャーナリストはNRK Sápmiにとられてしまうという状況がある。放送業界内部の賃金格差が大きく、テレビの方がかなり給料が高いからである。

第2に、将来に向けて、紙媒体からデジタルに移行したいと考えている。これが将来に向けた1番大きな挑戦であるという。ただし紙媒体からデジタルへ移行しても政府から補助金を受け続けることができるかどうかわからないという問題がある。世界の流れは、紙の新聞からネット新聞に変わってきた。とくに若者はネット新聞を利用している。ノルウェーでは25歳以下の人は紙の新聞をとっておらずだんだんとネットに移行している。だからこそデジタル化をする必要があるが、ネット新聞の場合、購読料がとりにくくなるという問題もあり、経営的な見通しを立てるのが課題である。

第3に、ノルウェーだけではなく全サーミ人のための新聞になりたいという目標がある。スウェーデン、フィンランド、ロシアにはサーミのための新聞はないが、現在の購読者はほとんどノルウェー国内で、国外は2%にすぎない。もっと国外の比率を高めたいと考えている。問題は紙媒体の新聞の場合、送るのに時間がかかるという点である。スウェーデンに送ると3日かかり、到達するまでに古いニュースになってしまう。ニュースはその日でないと意味がない。紙の新聞でなくデジタルであればそういうことはないが、デジタルにすると購読料や補助金をもらいにくいという問題がある。この問題を解決するためには国境を越えた協力が必要になる。たとえば、スウェーデン政府がサーミの新聞のお金を出すとなれば、“Ávvir”をスウェーデンで印刷し、発行することができる。テレビやラジオでは3つの国は協力しているから、新聞でも協力できればいいと考えている。

第4項 その他の活字メディア

他にもいくつかサーミの雑誌があるが、ここでは“Š”と“Gába”を取り上げる。

“Š”は若者向けの雑誌である（写真4）。“Š”はサーミ語を象徴するアルファベットで、[æ ſ]という発音記号とともに雑誌名となっている。1993年に創刊され、最初は年に2、3回の発行だったが、年4回になり、さらに現在は年6回の発行に増えている。2013年の最新号は71号である。雑誌は主に北サーミ語で書かれているが、南サーミ語やルレ・サーミ語、ノルウェー語で書かれている記事もある。サーミの若者の横顔を取り上げたり、若者を元気づけることが主要な目的である。また、サーミの若者に主流メディアとは異なるもう1つのメディアを提供するという意味もある。現在の編集責任者は21歳の若者である。一冊40NOKでスーパーなどで売られているが、サーミ語を教える学校や教育に関わっている人には無料で配布されている。



写真4 “Š”



写真5 “Gába”

もう1つサーミの女性の雑誌“Gába”（サーミ女性の声）という雑誌がある（写真5）。サーミ語とノルウェー語で1年に1、2回発行される。記事は、女性の視点からサーミ共同体について書かれているほか、レポート、インタビュー、エッセイ、詩、書評などで構成される。それは、「サーミの女性フォーラム」という組織によって発行され、サーミ議会から助成金を得ている。2013年12月の調査時点では、しばらく発行されていないということであった。

第4節 放送メディアの形成と現状

第1項 運営体制の特徴

(1) 組織・機構について

1946年に定期放送が始まったサーミラジオは、1976年にNRKの1部門となり、1984年にカラショーケに放送局を構えるようになる。1990年に初めてサーミ語のテレビ放送を開始し、1992年にはNRKサーミラジオはNRKの1部門として独立している。1999年にデジタルラジオ放送(DAB)を開始する。現在は、メディア毎に部門が分かれてはおらず、サーミラジオとサーミテレビとDABラジオなどは一本化され、NRK Sápmiとして運営されている。したがって、ここでもラジオとテレビに分けず、NRK Sápmiとして考察を進める。

NRK Sápmiは、NRKサーミラジオ時代の1985年以降現在までニルス氏が最高責任者の地位にある。すでに30年近く同じ人がトップにいることになる。われわれのインタビューにもニルス氏が対応してくれた。ニルス氏は、1992年にサーミラジオがNRKの一部門として独立した時に、NRKサーミラジオのトップとしてNRK全体の取締役会のメンバーに入っている。9人の取締役のうちの1人である。NRKの一部門となることで権利を得て、取締役会に代表が出席できるようになった。NRK Sápmiの成長にとって、取締役会議に出席し、取締役の1人として発言権を持つことは重要である。毎週火曜日に取締役の会議があり、普通はスカイプで会議をするが、月に1回はオスロへ出かけている。

(2) 従業員構成とその特徴

NRK Sápmiの中心はカラショーケにある事務所である。ここには107～110人のスタッフがい

る。スウェーデンのサーミラジオとサーミテレビのスタッフを合わせた数が22人であることを考えるといかに規模が大きいかがわかる。他に地方局が8つあり、地方局のなかではカウトケイノが従業員9人（女7人、男2人）と大きい。2003年には事務所が2倍に増築され、従業員が増えるとともに、番組制作・編集機能が整備された。他の地方局の従業員は2人程度である。従業員の数は、1985年が34人であったからこの30年あまりの間に3倍になっている。107～110人と幅があるのは、フリーランスを受け入れたりするので時によって違うためである。男女は半々で、ノルウェーの放送局は、できるだけ男女半々になるように配慮しているという。技術系に男性が多くなっている。

リーダーは5人で、男4人、女1人という構成である。ニュースの責任者、ニュース以外の番組の責任者、技術の責任者というように分かれているメディア毎に分かれてはいない。2006年までラジオとテレビで分かれていたが、2007年にそれをやめて、たとえば、ニュースなら、ラジオ、テレビ、ネットのニュースを一緒にやるようになった。ニュース番組のために取材をすれば、それを題材にラジオでもテレビでもネットでも使うことができるからである。ニュースの責任者3人は女性である。

従業員の70%はジャーナリストの仕事で、30%が写真や技術などの仕事をしている。ジャーナリストのうち60人はジャーナリストの教育を受けており、30人はほかの専門教育を受けている。全体に教育程度は高い。なかには才能があるので、特別な教育を受けていない人もいる。年齢は、ジャーナリストは平均35～40歳で、1番年上の人には64歳である。スタッフの70%はサーミで占められている。技術や写真はサーミである必要はない。ノルウェーであっても、サーミ語が話せて書ければ問題ないし、むしろサーミ語が話せて、サーミ文化を理解する人が増えることはいいことだと考えている。

（3）実習生の受け入れ

従業員のほかに毎年4人の実習生を6か月間受け入れている。高等学校を卒業して就職し、ジャーナリストの仕事が向いているかどうか経験して、その後大学へ進学する仕組みになっている。給料は毎月1万5,000NOKで、ノルウェーでは最も低い給料水準である。カウトケイノのサーミ大学との間にはいい関係が築かれている。たとえば、最初の6か月間にカウトケイノの大学でいろんなコースを勉強し、その後ここで6か月実習すると、9月に2年生に入ることができる。これは1つの特権である。その後3年間勉強すると学士号が取れる。6か月間の実習を終えて大学で勉強している間もここで働いている。これまで5年間実習生を受け入れているがやめたのは1人だけである。この放送局で学んで卒業後ここに戻ってくることで人材確保にもつながる。

（4）財政基盤

NRKは公共放送ゆえに主要財源は受信料収入である。スポーツイベントの中継など限定的なものの以外は広告放送は禁止されているので、受信料が全収入の約96%を占めている。受信料金は毎年値上げされており2013年のテレビ受信料は年額2,680.56NOK（約4万5,000円）である（NHK放送文化研究所編 2014：180）。NRK SápmiはNRKの1部門なので、この受信料から運営費が配分されることになる。2013年の運営費は9,000万NOK（約15億円）となっている。

第2項 放送のあり方について

（1）放送時間とタイムスケジュール

サーミラジオの年間放送時間は、1985 年の 329 時間から 2011 年には 1,785 時間（約週 34 時間）に増加している（Haetta 2013）。毎日、6～7 時間の番組を制作している。

表 3-1 は 2013 年 7 月 9 日月曜日のラジオのタイムテーブルを示したものである。朝、7～9 時までスウェーデンと共同で放送をしており、ノルウェーでは FM 放送と DAB (Digital Audio Broadcast) で聞くことができる。13 時半までは DAB のみである。13 時半～18 時までは FM 放送と DAB で、18 時からは DAB で再放送が流される。月曜日から金曜日がほぼ同じようなタイムテーブルで放送されており、土曜日と日曜日は放送時間が少なく、再放送が多くなっている。ラジオではスウェーデンとの協力関係が強い。

表 3-1 2013 年 7 月 9 日（月曜日）のタイムテーブル

07.00	Oddasat サーミ語のニュース	
07.05	Buorre Idit Sámpí	
07.30	Oddasat サーミ語のニュース	
07.35	Buorre Idit Sámpí 続き	FM + DAB
08.00	Oddasat サーミ語のニュース	
08.05	Buorre Idit Sámpí 続き	
08.30	Oddasat サーミ語のニュース	
08.35	Ruhkos	
09.00	Loudit	
09.30	Sámi musihkka (サーミ音楽)	DAB
11.30	60-logu musihkka (60 年代音楽)	
13.30	Dárogel oddasat ノルウェー語のニュース	
13.35	Oddasat サーミ語のニュース	
13.45	Julev sätta ルレ・サーミ語番組	
13.59	Máidhosat	
14.00	Oddasat サーミ語のニュース	
14.05	Rádiosiida	
15.00	Oddasat サーミ語のニュース	FM + DAB
15.05	Rádiosiida 続き	
16.00	Oddasat サーミ語のニュース	
16.10	Ávvudanboddu	
17.30	Dárogel oddasat ノルウェー語のニュース	
17.35	Oddasat サーミ語のニュース	
17.45	Julev sätta ルレ・サーミ語番組	
17.59	Máidhosat NRK Sámpí FM で 13.59 に放送したもの	
18.00	Oddasat サーミ語のニュース 14.00 からの再放送	
18.05	Rádiosiida 14.05 からの再放送	
19.00	Oddasat サーミ語のニュース 15.00 からの再放送	
19.05	Rádiosiida 続き 14.05 からの再放送	
20.00	Oddasat サーミ語のニュース 16.00 からの再放送	
20.10	Ávvudanboddu 16.10 からの再放送	
21.30	Loudit 09.00 からの再放送	
22.00	Oddasat サーミ語のニュース 07.00 からの再放送	
22.05	Buorre Idit Sámpí 07.05 からの再放送	
22.30	Oddasat サーミ語のニュース 07.30 からの再放送	
22.35	Buorre Idit Sámpí 07.05 からの再放送	
23.00	Oddasat サーミ語のニュース 08.00 からの再放送	
23.05	Buorre Idit Sámpí 07.05 からの再放送	
23.30	Oddasat サーミ語のニュース 08.30 からの再放送	
23.35	Ruhkos 08.35 からの再放送	

NRKでは2017年までにDAB方式に完全移行することになっており、そうなればサーミラジオもDABに移行しFM放送はやめることになる。現在はDABラジオを持っている人は少ないので、FM放送と併用している⁴⁾。

テレビは2001年の放送開始時には10分間のニュース番組だったが、2003年には15分に延長されている。現在は、北欧3国共通の15分番組（17時から17時15分）のほかに、夜の時間帯に5分間ノルウェーだけのニュース番組枠をもっている。この他に1週間に4回15分のサーミ語の子ども向けテレビ番組があり、2011年のテレビの年間放送時間は223時間（週約4時間20分）である。将来的にはWeb-TV Channelをもって24時間放送を目指している（Grønmo 2012; Haetta 2013）。

（2）放送内容

現在最も力を入れているのはニュースである（写真6）。サーミの見方からニュースをつくることは重要である。ノルウェーの普通の放送局もサーミのニュースを放送するが、サーミの視点からの放送はしていない。だからサーミの視点で放送することが重要になる。たとえば、ロシアとの協力ですごく大きなプロジェクトに取り組んだノルウェーの石油会社がある。主流社会の見方では成功したプロジェクトだが、サーミの見方によれば、公害につながり大きな問題になるプロジェクトである。また、ある映画の音楽を作った人がサーミであっても、そのことはノルウェーの他の放送局ではあまり語らない。自分たちにとってはサーミが作ったことが大きなニュースである。それぞれ文化的な背景があり、それによって何が大切なニュースで、何が大切でないかは決まる。ただし、サーミの文化に対して批判的であることも重要である。ただなんでもかんでも評価するのではなく、批判すべきことは批判していくという姿勢を大事にしている。



写真6 ニュース専用スタジオ



写真7 子ども番組専用スタジオ

また、子ども番組にも力を入れており、子ども番組専門のスタッフが10～15人おり、子ども番組専用スタジオもある（写真7）。ラジオに関しては15年位前に子ども番組の制作をやめており、いまは週1回スウェーデンで制作された番組を流すだけである。テレビでは1週間に4回15分のサーミ語の子ども向け番組を放送している。1991年に子ども番組が始まった時には1か月に1回だったが、その後、2週間に1回、1週間に1回と次第に増えてきて、2012年には1週間に4回になっている。2014年秋には週5回にすることを検討している。ラジオ番組の制作をやめたのはラジオの子ども番組はあまり聞かれないと判断した。テレビ番組を通じてサーミの言葉と文化を子ども

たちに広めることに力を入れている。

(3) 使用言語と字幕

使用言語は、主に北サーミ語で、それに南サーミ語とルレ・サーミ語が加わる。南サーミ語のエリヤにあるスノーサ(Snåsa: トロンハイムの近く)地方局で南サーミ語の番組が作られている。ティスフィヨルド(Tysfjord: 南部)にルレ・サーミ語の地方局がある。スタッフがそれぞれ2人いて、南サーミ語とルレ・サーミ語の番組を制作している。ラジオのタイムテーブルによると、ラジオでは、月曜日と水曜日にルレ・サーミ語の放送が13時45分からと17時45分からそれぞれ15分間放送されており、火曜と木曜日の同じ時間帯に、南サーミ語の番組が放送されている（前掲表3-1参照）。

テレビ番組にはノルウェー語の字幕が付くようになっている。サーミの人のなかにもサーミ語がわからない人もいること、またノルウェー人にも番組を通じてサーミの考え方を知ってもらうことが重要と考えるからである。子ども番組が放送されている時もノルウェー語の字幕を付けている。子どもたちはノルウェー語は分からぬかもしれないが、時には親も見るからノルウェー語の字幕があることは重要である。ノルウェー語の字幕を付けることができるからテレビの方がやりやすい面がある。ラジオではただしゃべるだけでサーミ語が分からぬ人には聞いてもらえない。だからテレビの方を重視することになる。独語、英語によるインタビューの場合は通訳がある。最初は少し独語や英語でのしゃべりが入り、その後サーミ語がかぶさり、それにノルウェー語の字幕がつけられる。あくまでもサーミ語による放送であることを目指している。

ニュース番組は、そのあとすぐにHPで見ることができ、HPでは文字情報が加わるのでさらにわかりやすくて非常に便利であるという。NRKでは昔の番組が見られるようになっており、サーミに関する古い番組を閲覧できることはサーミにとって興味深く、重要なことである。このようにインターネットの普及により情報環境が非常に充実してきている。

(4) 放送することの意義

改めて放送することの意味を尋ねてみた。サーミの人々にむけて歴史や文化や言葉を知らせる番組をつくることは、サーミのアイデンティティをつくるうえでとても重要であると答えてくれた。カラショーカやカウトケイノでは昔からサーミ語を話しているが、海岸の方へ行くとサーミとしての意識は薄く、サーミ語も使われなくなっている。海岸に住んでいるお年寄りのサーミは、サーミの文化や言葉をあまり使わないようにしているが、若い人のなかには、サーミ語を使ってもう一度サーミの文化を見直そうという機運も出てきている。だからとても大事な仕事である。そういう人たちの意識を高め、自分がサーミであることに誇りをもって生活できるようにすることが目的である。放送を通じてサーミに対する評価を高めていきたいと考えている。

もう1つの重要な意義は、マジョリティであるノルウェーの人たちに情報を届けることである。「私たちはここにいるんだよ」ということをまずは知ってもらいたいからである。北欧3国の放送局が2011年にサーミの人々を対象に実施した調査結果でも、サーミの人々とマジョリティの人々の両方に情報を広げることの必要性が指摘された⁵⁾。サーミとマジョリティの両方の意見を知り比較することで、はじめて相互に理解できることも多い。だからサーミの考え方や見方をマジョリティにも広げる必要がある。と同時に、世界中の先住民族とメディアを通じて繋がることも重要である。情報を共有することで先住民族という集団としての力も強くなり、他の人たちに対してわれわれ自

身の評価を高めることができるからである (Haetta 2013)。

第3項 他の諸国との関係

(1) 北欧3国との関係

さて、冒頭で述べたようにノルウェーは北欧3国のメディアにおいてリーダー的存在である。ここではその点に留意して北欧3国の関係について見てみる。

まず、テレビの15分のニュース番組は北欧3国共同で制作している。放送時間は、ノルウェーとスウェーデンは同じ時間（17時～17時15分）であるが、フィンランドは少し後の時間の放送になっており、協力関係という点ではスウェーデンとの関係の方が強い。ラジオについても同様の傾向にある。毎朝2時間のラジオ番組をスウェーデンとノルウェーは協力してやっているが、フィンランドは加わっていない。2時間のラジオ番組は、スウェーデンのキルナに1人、ノルウェーのカラショーケに1人がすわって放送している。

この点についてニルス氏は次のように説明している。3つの国が協力することは重要だが、フィンランド政府があまりサポートしないためフィンランドのサーミ放送局は経済的に難しい面がある。協力するためには3つの国がそれぞれ自分から情報を持ち込まないとうまくいかない。フィンランドのサーミは協力したいと思っているが、フィンランドの政府が協力的ではないためやや難しい面がある。各国の政府の姿勢の違いが協力関係に影響しているという説明である。

ノルウェーで放送されているものはすべてニルス氏が放送責任をもっている。スウェーデンからの番組はスウェーデンの人が、フィンランドはフィンランドの人が放送責任をもっている。毎朝9時まではノルウェーとスウェーデンとフィンランドの間でスカイプを使ってディスカッションをしており、そこで話し合って番組の中身を決めている。ただし、最後の決定権はノルウェーが持っている。番組を積極的に作っているのはノルウェーのカラショーケ事務所だからだと説明された。ここに力関係の一端が表れている。

もちろんスウェーデンやフィンランドの意見をよく聞いて、向こうにも合うようにしないと協力はうまくいかない。3つの国はそれぞれ倫理観が異なるので、時々問題になることがあるという。たとえば、雪崩で亡くなった男の子がいる。亡くなった男の子の名前を発表するかどうかの判断は国によって違う。ノルウェーでは、亡くなった人の名前を家族が発表していいといえば発表する。スウェーデンでは名前を発表するという習慣はない。問題になりそうな時は、毎朝のミーティングでよく話し合って決める。このケースの場合は、スウェーデンでも問題がないということになり放送した。

(2) コラ半島のサーミとの関係

サーミは北欧3国の他にロシアのコラ半島にも居住している。このコラ半島のサーミをサポートする活動もかつて行われていた。ニルス氏は、1998年にロシアのサーミ自身がラジオ局を持つことができるよう手助けしてほしいと頼まれて、2000年からコラ半島にサーミのラジオ局を開局するためのプロジェクトを開始した。2000～2005年は北欧の国家から補助金が出ており、フィンランドと協力してプロジェクトを進めた。その結果、コラ半島で2003年12月31日にラジオ局がスタートしている(Haetta 2013)。ただし、2005年にプロジェクトが終了して以降は直接的に関わっていないが、たぶん放送は続いているということであった。

(3) WITBNとの関係

さらに世界の先住民族との交流も活発になっている。WITBNという組織がある。World Indigenous Television Broadcasters Networkの略で、世界の先住民のテレビ放送ネットワークである。先住民の言語と文化を守り、発展させるために、世界中にある先住民のテレビ放送を繋ぐことを目的に2008年に設立された。NRK Sápmiとニュージランドのマオリの放送局が創設メンバーであり、現在16の放送局がメンバーとなっている⁶⁾。北欧では、当初 NRK Sápmiのみが参加していたが、最近 SVT SápmiとYLE Sápmiも加盟している。各国持ち回りで毎年1回国際会議を開くほか、毎年最も優秀な番組に対してジャーナリズム賞を授与している。2012年のWITBNの国際会議がカラショーケで開かれた。会員はもとよりロシアなど会員外からの参加もあった。代表も持ち回りで、2014年から2年間はニルス氏が就任することになっている。

WITBNの1番のメリットは、お互いに番組を共有できることにある。たとえば、8メンバーがいて、それぞれ4つのプログラムを提供すると、自分の局の番組以外に28の番組を利用することができるようになる。また、インターネットでお互いのニュースの番組を共有することができる。大きな局は毎日ニュースをネットに掲載するので、他の局がそこから引き出すことができる。NRK Sápmiでは1週間に1つのニュースを入れる約束をしている。さらに「先住民族の視点」というサイトがあり、そこにはニュースとドキュメンタリーの中間的な番組が共有されている。

番組を共有することによってサーミの情報を世界に発信することができるし、サーミの側も世界の先住民の情報を得ることができる。また、なによりも放送する番組のコンテンツを充実させるという点でも非常に有効な方法である。先に指摘したようにコンテンツの充実は24時間放送の実現にとっても重要なポイントになっている。ここ4,5年でこうした協力関係が格段に充実してきており、コンテンツも豊かになってきているという。

この他に人的な交流も行われている。われわれが訪問したときには台湾の先住民族メディアから1人の女性がNRK Sápmiに研修に来ていた。彼女は、NRK Sápmiで2年間研修し、その後さらにカナダで研修することになっているという。このようにWITBNは、番組共有や人的交流で大きな成果をあげていることがわかる。

第5節 サーミ・メディアの現状と課題

以上、ノルウェーのサーミ・メディアの形成過程と現状について見てきた。ここでその特徴についてまとめておく。

第1に、ノルウェーのサーミ・メディアの充実度である。放送メディアに関しては、公共放送の中に位置づけられているという点は3国で共通しているが、予算規模やスタッフの数は他国を大きく引き離している。NRK Sápmiのスタッフの数は100人を超えており、スウェーデンの放送局の約5倍である。また、日刊新聞が2紙存在することも特筆される。スウェーデンとフィンランドには日刊新聞はなく、スウェーデンには月刊や季刊の雑誌があるのみである。フィンランドには、このレベルの活字メディアは存在しない。放送メディア、活字メディアとともにノルウェーの充実度が突出している。

第2に、その背景には財政状況の違いが存在する。NRK Sápmiは、公共放送の1部門であるため受信料が財源となっており財政的に安定している。これはスウェーデンも同じであった。一方、

活字メディアの場合は、政府の補助金がその経営を支えている。2014年には、新聞全体として2,400万NOK（約4億円）の補助金が支払われている。“Ságat”と“Ávvir”的責任者は、ともに政府の補助金がなければ新聞の発行を継続することは難しいと語っている。ただし、NRK Sápmiに比べると不安定な要素もある。活字メディアの補助金は、政権が替わることによって影響を受けるからである。サーミへの理解がない政党が政権を担当するようになると補助金が減額される可能性がある。それだけに財源を安定的に確保することが課題としてあげられていた。

第3に、メディアにおける「編集の自由」が法律できちんと保障されている点が指摘できる。日本の場合、行政から補助金をもらうと自由に番組をつくることが制限される危険性があるという理由から、あえて行政の資金援助を辞退するというケースが見られる⁷⁾。このような発想でノルウェーの活字メディアをみると、補助金額が大きいだけに国の介入があるのではないかと危惧してしまう。しかし、こうした危惧に対する答えは、どこでも強く「ノー」であった。「それはあり得ない」という。行政だけではなく、会社の経営陣からの編集権の独立も、「メディアの編集の自由に関する法律」によって保障されている。経済的な自立がきわめて難しい先住民族メディアにとって、周囲から圧力を受けることなく自分たちの主張ができるこの権利はきわめて重要である。

第4に、コンテンツやジャーナリストが不足するという問題状況がある。“Ávvir”はサーミ語ができるジャーナリストが足りないという問題を抱えていた。背景には、賃金格差があるためNRK Sápmiの方に人材が流れてしまうという事情が存在する。一方、NRK Sápmiは、将来的にウェブTVでの24時間放送を目指しているが、その場合もコンテンツとジャーナリストの確保が必要になる。24時間放送に関してノルウェー政府とNRKは、「サーミの人口規模が小さく、多くの地域でコンテンツ制作にあたる人材が不足している」という理由から、時期尚早と判断しているという(Haetta 2013)。この状況を改善するためにはコンテンツの充実やジャーナリストの養成が求められる。このうちコンテンツの充実に関しては、WITBNを介しての番組共有が1つの有効な手段として注目されていた。

第5に、先住民族メディアの役割は、サーミ内部での情報共有と外部に対する情報発信におかれていた。番組作りとしてはニュースと子ども番組が重視されている。ニュースが重要視されるのは、サーミ自身の視点で情報を発信することが重要だからである。内部にあっては情報を共有し先住民族としてのアイデンティティの育成をはかり、外部に対してはサーミとしての見解をマジョリティの人たちに届けるという意義がある。また、子ども番組を重視するのは、いうまでもなく次世代のサーミ文化の担い手を育てるためである。とくに子ども番組の場合は、ラジオよりテレビが重視されていた。

第6に、報道姿勢としては様々なサーミの意見を取り上げることが意識されている。トナカイ業を生業とするサーミは鉱山開発と利害が対立するが、地域産業の振興のために鉱山会社の進出を歓迎するサーミ地域もある。“Ságat”ではサーミ自身が望むなら後者の立場も支援するし、とくにサーミが少数派の地域の人たちを応援する記事を書くことを重視していた。「サーミ・メディアであれば鉱山反対を主張する」というステレオタイプの理解は間違いでいる。また、放送でも新聞でも、サーミに関しても批判すべきところは批判するというスタンスも大事にしている。こうした姿勢がサーミ・メディアに対する信頼を高めることにつながるからである。

第7に、インターネットが果たす役割が大きくなっている点である。放送メディアにおいて

は、番組をネットで公開することによってオンデマンドで番組を引き出すことができるようになる。また、テレビ放送された番組に新たに文字情報を加えることも可能になる。24時間のTV放送の実現もウェブTVを前提としての話であり、インターネットを使えば北欧3国に限らず全世界からのアクセスが可能になる。もちろんWITBNを介しての番組共有もインターネットの普及によるところが大きい。活字メディアにおいても同様である。“Ávvir”はノルウェーのサーミだけではなく、全サーミのための新聞になりたいという目標を掲げているが、これもネット新聞によって可能になる。紙媒体であれば、制作にコストがかかり、配達に時間もお金も必要となる。紙媒体からネット新聞への移行により補助金が引き続き確保できるのか、購読料を確実に徴収できるのか、といった経営上の課題がクリアできれば、ネット新聞への移行可能性は格段に高まるだろう。

第8に、北欧3国の足並みが必ずしも揃っていないことは今回も確認できた。不協和音をもたらしている1つの要因は、政府の財政的援助の違いにある。財政的支援が大きいノルウェーと、小さいフィンランドが同じレベルで協力することは難しい。資金とスタッフが相対的に充実しているノルウェーは番組づくりに意欲的だが、他の国が同じレベルで番組を制作できるとは限らない。そのためノルウェーは、ある程度の経済的支援があるスウェーデンと協力関係にあるが、フィンランドとの関係は相対的に弱い。また、放送番組の編集における最終的な決定権はノルウェーが握っている。決定権を握るノルウェーの調査からはその点に対する問題を指摘する声は聞かれなかったが、もっとも立場が弱いフィンランドではどうであろうか。その点の考察は今後の課題である。

第6節 サーミ・メディアの利用状況と情報発信

第1項 調査対象者の概要

さて、以上、ノルウェーにおけるサーミ・メディアの存在状況について見てきた。本節では、それをふまえてサーミの人々がこれらをどの程度利用しているかについて考察していく。対象とするのは、これまで本報告書の第1～2章で対象としてきた全ケース246で、内訳は、基礎学校生徒81人、サーミ高校生71人、基礎学校教員11人、サーミ高校教員7人、基礎学校保護者64人、サーミ高校保護者4人である。表3-2は、対象者の男女別構成を示したものである。全体では、男性44.9%、女性55.1%と女性が多いが、属性によって大きく異なっており、教員と保護者は7割が女性であるのに対して、生徒は男性が55.3%と半分を超えている。

年齢別では、生徒は10代がほとんどだが、高校生には20代が4人混じる。教員は40代、50代が中心で、基礎学校教員には20代という若い教員が3人いる。保護者は、55.2%が40代で、60代の1人を除き全員が30～50代である（表3-3）。10代が全体の61.7%を占め、上は50代までという年齢幅のなかにほとんどの対象者が位置している。

表3-2 調査対象者の性別

	実 数(人)			比 率(%)		
	男	女	計	男	女	計
基礎学校生徒	47	34	81	58.0	42.0	100.0
高校生	37	34	71	52.1	47.9	100.0
生徒計	84	68	152	55.3	44.7	100.0
基礎学校教員	3	11	14	21.4	78.6	100.0
高校教員	4	7	11	36.4	63.6	100.0
教員計	7	18	25	28.0	72.0	100.0
基礎学校保護者	16	48	64	25.0	75.0	100.0
高校保護者	3	1	4	75.0	25.0	100.0
保護者計	19	49	68	27.9	72.1	100.0
総計	110	135	245	44.9	55.1	100.0

注) 有効回答 = 245

資料: 実態調査より作成

表3-3 調査対象者の基本属性

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	計
実数・人	基礎学校生徒	84	0	0	0	0	0	84
	高校生	64	5	0	0	0	0	69
	生徒計	148	5	0	0	0	0	153
	基礎学校教員	0	3	0	3	4	1	11
	高校教員	0	0	1	3	5	0	9
	教員計	0	3	1	6	9	1	20
	基礎学校保護者	0	4	17	36	6	1	64
	高校保護者	0	0	1	1	1	0	3
	保護者計	0	4	18	37	7	1	67
総計		148	12	19	43	16	2	240
比率・%	基礎学校生徒	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	高校生	92.8	7.2	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	生徒計	96.7	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	基礎学校教員	0.0	27.3	0.0	27.3	36.4	9.1	100.0
	高校教員	0.0	0.0	11.1	33.3	55.6	0.0	100.0
	教員計	0.0	15.0	5.0	30.0	45.0	5.0	100.0
	基礎学校保護者	0.0	6.3	26.6	56.3	9.4	1.6	100.0
	高校保護者	0.0	0.0	33.3	33.3	33.3	0.0	100.0
	保護者計	0.0	6.0	26.9	55.2	10.4	1.5	100.0
総計		61.7	5.0	7.9	17.9	6.7	0.8	100.0

注) 有効回答 240

資料: 実態調査より作成

表3-4 使えるサーミ語について

サーミ語が使える	238	96.7
北サーミ語	238	96.7
ルレ・サーミ語	4	1.6
南サーミ語	4	1.6
その他のサーミ語	3	1.2
サーミ語は使えない	8	3.3
有効回答数	246	100.0

資料: 実態調査より作成

使用可能なサーミ語を見たのが表3-4である。サーミ語が使える人が238人、96.7%を占める。フィンマルク地方でもサーミが多いカウトケイノとカラショーケだけに、サーミ語が利用できる人の比率は高い。サーミ語の方言別からみると238人全員が北サーミ語を使えることがわかる。ルレ・

サーミ語、南サーミ語、その他のサーミ語をえる人も数名いるが、いずれも北サーミ語と合わせて2つの方言を使える人である。このように方言のなかでも北サーミ語が利用可能という人の比率が圧倒的に高く、このことがこの地域のメディアのあり方に与えている影響は大きい。それに対してサーミ語が使えない人は8人いる。属性別には、高校生4人、基礎学校保護者2人、基礎学校教員2人である。

第2項 利用状況

属性別にサーミ・メディアの利用状況を見たのが表3-5である。教師と保護者については、基礎学校と高校を合わせて表示している。まず、全体を確認しておくと、最も利用率が高いのがNRK サーミラジオの番組で57.9%、ついでテレビ NRK の番組57.5%、Ávvir が50.8%、Š が39.6%、サーミのウェブラジオが34.6%、Ságat が22.1%と続く。放送メディアの利用率が高く、新聞では北サーミ語で発行されている Ávvir を半数の人が利用している。96.7%の人が北サーミ語を使用可能であると答えているだけに、言語の壁は低いといえる。また、「どれも利用していない」という人も16.7%存在している。

属性別には、ほとんどのメディアで、保護者や教師の利用率がきわめて高くなっている。なかでも保護者は、テレビ NRK の番組が92.9%、NRK サーミラジオの番組が87.1%、Ávvir が82.9%と、教師を上回る非常に高い利用率である。基礎学校と高校の生徒を比較すると、NRK サーミラジオの番組やテレビ NRK の番組や Ságat は高校生の方が利用率が高いが、Š は基礎学校の生徒の利用率が53.2%と高くなっている。この数値は、教師や保護者よりも高く、Š が基礎学校の13歳から15歳の生徒によく利用されていることがわかる。一方、「どれも利用していない」という人が全体で16.7%存在し、保護者(2.9%)と教師(7.7%)が低率なのに対し、高校生(31.3%)と基礎学校生(19.5%)は高い。とくに高校生の3割が「どれも利用していない」と答えている点が目を引く。カイ二乗検定の結果からも、属性とサーミ・メディアの利用状況の間に有意な差があることがわかる。

表3-5 属性別サーミ・メディアの利用状況

単位：%

	基礎学 校生徒 (8-10 年生)	サーミ 高校生 徒	教師	保護者	全体	χ ² 検定結果		
						χ ²	d f	p
NRK サーミラジオの番組	31.2	49.3	80.8	87.1	57.9	54.768	3	p<.001
サーミのウェブラジオ	24.7	20.9	42.3	55.7	34.6	23.392	3	p<.001
テレビ NRK の番組 (Oddasatなど)	29.9	44.8	76.9	92.9	57.5	68.316	3	p<.001
文字テレビ (text TV) の情報	6.5	1.5	26.9	24.3	12.5	23.797	3	p<.001
Ávvir	32.5	28.4	76.9	82.9	50.8	59.737	3	p<.001
Ságat	3.9	23.9	34.6	35.7	22.1	24.860	3	p<.001
Š	53.2	14.9	46.2	42.9	39.6	25.570	3	p<.001
Gába	1.3	0.0	7.7	8.6	3.8	9.520	3	p<.005
Samefolke	2.6	0.0	0.0	11.4	4.2	13.763	3	p<.01
Nuorat	10.4	3.0	0.0	7.1	6.3	5.289	3	n.s
その他	6.5	6.0	19.2	4.3	7.1	6.829	3	p<.1
どれも利用していない	19.5	31.3	7.7	2.9	16.7	21.949	3	p<.001
回答者数(実数)	77	67	26	70	240			

注) 有効回答数 = 240

資料：実態調査より作成

表3－6は、性別とサーミ・メディアの利用状況を示したものである。全体的に男性よりも女性の利用率が高い傾向が見られる。とくに、NRK サーミラジオの番組（65.4%）、サーミのウェブラジオ（42.9%）、テレビ NRK の番組（58.2%）、Ávvir（59.4%）、Š（47.4%）では、女性の利用率が高く、カイ二乗検定でも1%水準で有意な差が確認できる。その一方で、「どれも利用しない」という人は男性24.2%、女性12.0%と男性が高くなっている。

表3－6 性別サーミ・メディアの利用状況

	男	女	計	χ^2 検定結果		
				χ^2	d f	p
NRK サーミラジオの番組	46.5	65.4	57.3	8.330	1	p<.01
サーミのウェブラジオ	22.2	42.9	34.1	10.761	1	p<.01
テレビ NRK の番組 (Oddasatなど)	45.5	67.7	58.2	11.512	1	p<.01
文字テレビ (text TV) の情報	10.1	14.3	12.5	0.909	1	n.s
Ávvir	39.4	59.4	50.8	9.088	1	p<.01
Ságat	21.2	21.8	21.6	0.012	1	n.s
Š	28.3	47.4	39.2	8.672	1	p<.01
Gába	2.0	4.6	3.4	1.058	1	n.s
Samefolke	3.0	5.3	4.3	0.688	1	n.s
Nuorat	5.1	6.8	6.0	0.295	1	n.s
その他	6.1	6.8	6.5	0.047	1	n.s
どれも利用していない	24.2	12.0	17.2	5.932	1	p<.05
回答者数（実数）	96	122	218			

資料：実態調査より作成

表3－7 年代層別サーミ・メディアの利用状況

	10代	20、30代	40代以上	全体	χ^2 検定結果		
					χ^2	d f	p
NRK サーミラジオの番組	38.0	80.6	86.4	56.4	48.012	2	p<.001
サーミのウェブラジオ	24.1	38.7	57.6	34.8	20.687	2	p<.001
テレビ NRK の番組 (Oddasatなど)	35.0	87.1	93.2	57.3	70.104	2	p<.001
文字テレビ (text TV) の情報	4.4	12.9	30.5	12.3	26.048	2	p<.001
Ávvir	31.4	61.3	86.4	49.8	51.902	2	p<.001
Ságat	10.9	38.7	35.6	21.1	21.664	2	p<.001
Š	36.5	45.2	40.7	38.8	0.922	2	n.s
Gába	0.7	3.2	6.8	2.6	5.913	2	p<1
Samefolke	1.5	3.2	11.9	4.4	10.720	2	p<.01
Nuorat	6.6	3.2	6.8	6.2	0.540	2	n.s
その他	6.6	3.2	8.5	6.6	0.908	2	n.s
どれも利用していない	25.5	6.5	3.4	17.2	17.134	2	p<.001
回答者数（実数）	137	28	51	216			

資料：実態調査より作成

年齢層によってもサーミ・メディアの利用状況は異なる（表3－7）。10代、20、30代、40代以上に分けてみた場合、NRK サーミラジオの番組、サーミのウェブラジオ、テレビ NRK の番組、文字テレビ情報、Ávvir は、年齢が上の層ほど利用率が高い。いずれも1%水準で有意な差がある。とくに Ávvir は、10代（31.4%）、20、30代（61.3%）、40代以上（86.4%）とそうした傾向が顕著である。これに対して Ságat は 20、30代（38.7%）と 40代以上（35.6%）とその差は小さく、Š には年齢層とのあいだに有意な差は見られない。Š は、若者向けの雑誌といわれるが、どの年齢層

にも4割程度の利用者がいるという特徴が見られる。

第3項 利用程度

次に、サーミ・メディアの利用程度を、利用しているサーミ・メディアの数から見てみた。11のサーミ・メディアの選択肢のなかから6個以上を選んだ人を利用程度の高い人（「高」）、3～5個選んだ人を「中」、1, 2個選んだ人を「低」とした。それと属性をクロスしたのが表3-8である。全体では、「高」が13.8%、「中」が40.4%、「低」が29.6%、「利用しない」が16.3%となっている。属性別には、やはり教師と保護者の利用程度が高く、「高」が約30%、「中」が50～60%で、3個以上のサーミ・メディアを利用する人が8, 9割を占めている。とくに保護者の利用程度は高い。基礎学校やサーミ高校の生徒は「中」や「低」が多く、とくに基礎学校の生徒の半分は「低」である。ただし、サーミ高校生には「利用しない」人が約3割存在しており、一概に基礎学校の生徒の方が利用程度が低いとはいきれない。

性別ではやはり女性の利用程度が顕著に高い（表3-9）。女子は、「高」が17.3%、「中」が48.1%と3つ以上を選択した人が65.4%であるのに対して、男性は合わせて38.4%にとどまっている。カイ二乗検定結果は1%水準で有意差があるとなった。

表3-8 属性別サーミ・メディアの利用程度

利用程度	基礎学校生徒 (8-10年生)	サーミ高校生徒	教師	保護者	全体
高	4 5.2%	0 0.0%	8 30.8%	21 30.0%	33 13.8%
中	19 24.7%	24 35.8%	13 50.0%	41 58.6%	97 40.4%
低	39 50.6%	23 34.3%	3 11.5%	6 8.6%	71 29.6%
利用しない	15 19.5%	20 29.9%	2 7.7%	2 2.9%	39 16.3%
計	77 100.0%	67 100.0%	26 100.0%	70 100.0%	240 100.0%

注) 利用程度 高=6個以上、中=3～5、低=1, 2 $\chi^2=85.991$ 、df=9、p<0.001
資料：実態調査より作成

表3-9 性別サーミ・メディアの利用程度

利用程度	男	女	計
高	9 9.1%	23 17.3%	32 13.8%
中	29 29.3%	64 48.1%	93 40.1%
低	37 37.4%	31 23.3%	68 29.3%
利用しない	24 24.2%	15 11.3%	39 16.8%
計	99 100.0%	133 100.0%	232 100.0%

注) 利用程度 高=6個以上、中=3～5、
低=1, 2
 $\chi^2=17.292$ 、df=3、p<0.01
資料：実態調査より作成

表3-10 年代層別サーミ・メディアの利用程度

利用程度	10代	20、30代	40代以上	計
高	4 2.9%	5 16.1%	20 33.9%	29 12.8%
中	40 29.2%	20 64.5%	33 55.9%	93 41.0%
低	59 43.1%	4 12.9%	4 6.8%	67 29.5%
利用しない	34 24.8%	2 6.5%	2 3.4%	38 16.7%
計	137 100.0%	31 100.0%	59 100.0%	227 100.0%

注) 利用程度 高=6個以上、中=3～5、低=1, 2
 $\chi^2=85.991$ 、df=9、p<0.001
資料：実態調査より作成

年齢層別には、年齢が上の層ほど利用程度が高く、「高」が40代以上では33.9%であるのに対して、20、30代は16.1%、10代は2.9%と顕著な差が確認できる(表3-10)。逆に、利用しないという人は、40代以上で3.4%、20、30代で6.5%であるのに対して10代は24.8%と、4分の1を占める結果となつた。

第4項 情報発信

それでは外部に対する情報発信の現状についてどのように評価しているのであろうか。先に見るようにサーミ社会の外に対する情報発信はサーミ・メディアの果たす大きな役割の1つと考えられていた。「サーミ自身によるサーミ以外の人に対する、メディアやイベントなどを通じた情報発信は十分におこなわれているかと思うか」という質問をしている。ただし、この質問は基礎学校の生徒には行っていない。表3-11はその結果を属性別に示したものである。全体的には、「まったく不十分である」と評価している人が20.2%で、「あまり行われていない」47.9%と合わせると68.1%の人が否定的に評価している。属性別には、否定的な回答をした人の比率は、高校生55.8%<保護者72.1%<教師が88.9%の順で高くなっている。高校生は「わからない」とする人が19.1%おり、「十分に行われている」という人も10.3%存在する。

情報発信への評価を性別にみたのが表3-12である。明らかに女性の方が否定的な意見を述べる人が多い。「まったく不十分である」と「あまり行われていない」を合わせると男性が51.7%であるのに対して、女性は76.0%という結果になった。男性には「十分に行われている」(13.8%)と「まあまあ行われている」(20.7%)という肯定的な評価をする人が34.5%も存在している。

表3-11 属性別情報発信への評価

	十分に行われている	まあまあ行われている	あまり行われていない	まったく不十分である	わからない	計
高校生	7 10.3%	10 14.7%	26 38.2%	12 17.6%	13 19.1%	68 100.0%
教師	0 0.0%	2 7.4%	20 74.1%	4 14.8%	1 3.7%	27 100.0%
保護者	1 1.5%	16 23.5%	32 47.1%	17 25.0%	2 2.9%	68 100.0%
計	8 4.9%	28 17.2%	78 47.9%	33 20.2%	16 9.8%	163 100.0%

注) $\chi^2=27.199$ 、df=8、p<0.01

資料：実態調査より作成

表3-12 性別情報発信への評価

	十分に行われている	まあまあ行われている	あまり行われていない	まったく不十分である	わからない	計
男	8 13.8%	12 20.7%	21 36.2%	9 15.5%	8 13.8%	58 100.0%
女	0 0.0%	16 16.0%	52 52.0%	24 24.0%	8 8.0%	100 100.0%
計	8 5.1%	28 17.7%	73 46.2%	33 20.9%	16 10.1%	158 100.0%

注) $\chi^2=18.712$ 、df=4、p<0.01

資料：実態調査より作成

表3-13 年齢層別情報発信への評価

	十分に行われている	まあまあ行われている	あまり行われていない	まったく不十分である	わからない	計
10代	6 9.8%	9 14.8%	24 39.3%	10 16.4%	12 19.7%	61 100.0%
20、30代	0 0.0%	8 25.8%	14 45.2%	6 19.4%	3 9.7%	31 100.0%
40代以上	1 1.7%	11 19.0%	31 53.4%	15 25.9%	0 0.0%	58 100.0%
計	7 4.7%	28 18.7%	69 46.0%	31 20.7%	15 10.0%	150 100.0%

注) $\chi^2=21.489$ 、df=8、p<0.01

資料：実態調査より作成

表3-14 利用程度別情報発信への評価

利用程度	十分に行われている	まあまあ行われている	あまり行われていない	まったく不十分である	わからない	計
高	0 0.0%	2 6.9%	16 55.2%	10 34.5%	1 3.4%	29 100.0%
中	2 2.6%	12 15.8%	42 55.3%	17 22.4%	3 3.9%	76 100.0%
低	1 3.2%	10 32.3%	13 41.9%	2 6.5%	5 16.1%	31 100.0%
利用しない	5 20.8%	4 16.7%	5 20.8%	3 12.5%	7 29.2%	24 100.0%
計	8 5.0%	28 17.5%	76 47.5%	32 20.0%	16 10.0%	160 100.0%

注) $\chi^2=46.293$ 、df=12、p<0.001

資料：実態調査より作成

表3-13は年齢層別に情報発信への評価を示したものである。年齢層が高くなるほど否定的な評価をする人が多くなる。「まったく不十分である」と「あまり行われていない」という人の比率は、10代が55.7%、20、30代が64.6%、40代以上が79.3%となっている。

ついで利用程度別の結果を見てみた(表3-14)。利用程度が高い人ほど否定的な意見が多くなっている。「まったく不十分である」と「あまり行われていない」という人の比率は、利用程度が「高」で89.7%、「中」で77.7%、「低」で48.4%、「利用しない」で33.3%となっている。カイ二乗検定の結果からも0.1%水準で有意な差があることがわかる。

第5項 小括

以上、メディアの利用状況と情報発信に対する評価を見てきた。属性別には高校生や基礎学校の生徒より保護者や教師、性別には男性よりも女性、年齢的には10代より40代以上の方が、メディアをよく利用する傾向が見られた。このうち女性の方が利用率が高いというのはサーミ社会の特徴といえる。Ávvirでは、新聞読者の中心が30歳以上の女性であるという回答を得ているが、利用状況の調査もそれを裏付ける結果となった。Ávvirを利用する人は男性が39.8%であるのに対して、女性は59.4%と、20%も差があるのである。インタビューに応じてくれたÁvvirの経営者によると、この辺では大学へ行くのは主に女性であるという。カウトケイノやカラショーケではそういう傾向があり、「男性は体を使って働き、女性は頭を使って働く」と述べている。新聞読者の中心が30歳以上の女性という点も、この発言と重ね合わせると理解できる。なお、利用程度が低い層としては

サーミ高校の生徒があげられる。サーミ・メディアをどれも利用していないという人が約3割おり、基礎学校の生徒よりも多い。若い人たちへのサーミ文化の継承という視点からも、今後のアプローチが必要な層と見ることができる。

一方、外部への情報発信という点では、一般的にメディアの利用率が高い人ほど外部への情報発信について厳しい見方をしている傾向が見てとれた。利用度が高い人ほど否定的な回答が多くなるのである。ただし、属性別の結果だけは若干異なる結果となった。メディアの利用度は保護者の方が教師よりも高いが、情報発信に対する否定的な回答は教師の方が保護者よりも高いという結果になった。教師の場合、現実をより厳しい目で見ていることが示されているのであろう。

おわりに

以上、ノルウェーのサーミ・メディアの現状とその利用状況について見てきた。その特徴点は、すでにそれぞれについてまとめているのでここでは繰り返さない。北欧3国の中でもリーダー格のノルウェーは、財政的にかなり恵まれた状況にあり、メディア関係者によって積極的な番組づくりや紙面づくりが行われていた。その「豊かさ」がゆえに他国との間で共同歩調をとりにく一面も見受けられた。だが、世界の先住民族がおかれた状況を考えるならば、その優位さを生かし、WEBなどの技術を積極的に取り入れ、その成果を他の先住民族の取り組みにも還元していくこそが重要のように思われる。

また、今回のノルウェーの調査から学んだことは、単に財政的援助のみで今の状況が保障されているわけではないという点である。その一方で、「編集の自由」がきちんと守られているからこそ実現されているのである。政府も、株主も、経営者も、編集者の「編集の自由」を侵してはならないことが法律に明記されている。単に明記されているだけではなく、「政府や株主からなんらかの圧力がかかることはないのか」という質問に対して、みな一様に、なんという愚問だという表情で、「そんなことはありえない」と力強く答えてくれた。その様子から、「編集の自由」が絵に描いた餅ではないことが十分に理解できた。

翻ってわが国のアイヌの人たちが置かれたメディア環境を考えると、あまりの格差に絶望感さえ覚えるが、少なくとも財政的支援を求めるとともに、「編集の自由」を保障する取り組みも同時に進めることができることだけは間違いないであろう。

注

- 1) 以上は、NRK の HP に掲載されている “NRK Sápmi's history” と Nils Johan Heatta へのインタビュー調査結果からまとめたものである。
- 2) インタビューが行われた際(2013年12月12日)に使用された会社側の資料にもとづく。“Ávvir” に関しては、主にその資料とインタビュー結果からまとめている。
- 3) ノルウェーでは、2008年6月13日に、「メディアの編集の自由に関する法律」が発効している。そこでは、メディア企業のオーナーは編集に関することに対して、命令したり、支配したりすることはできないし、してはならないこと、編集者は自分の望む通りに発信する権利と自由を有することが定められている。
- 4) NRK では2017年までにラジオはデジタル方式に完全移行する予定である。デジタル化にとも

ない NRK Sápmi 側は、サーミ独自の放送チャンネルを要求しているが、いまのところ NRK の計画のなかにはそうした内容は含まれていないという。

- 5) その結果は、“*Nordic Sámi Survey 2011 – Additional report: Media usage among Sámi people in Norway, Sweden and Finland*” という報告書としてまとめられている。
- 6) WITBN のHP (<http://www.witbn.org/>) を参照のこと。
- 7) たとえば、北海道留萌市のコミュニティ放送局“FM もえる”では、同様の理由から自治体の出資を断っている。詳しくは小内（2010）参照のこと。

参考文献

- Grønmo, E. J., 2012, “NRK Sápmi : A Decade to Digitalization”, World Indigenous Television Broadcasting Network Newsletter.
- Haetta, N. J., 2013, “NRK Sápmi : Telling our part of the story”, World Indigenous Television Broadcasting Network Newsletter. Retrieved from www.witbn.org/index.php/newsletter/feature/cover-story/item/158-telling-our-part-of-the-story/ (最終閲覧日 2013年5月16日)
- 伊藤直哉・八幡耕一, 2004, 「先住民族メディアの理論に向けた社会的機能についての考察 —関連する国際機関の概観とともに—」『北海道大学大学院国際広報メディア研究科・言語文化紀要』第47号, 1–26.
- NHK 放送文化研究所編, 2014, 『NHK データブック世界の放送 2014』 NHK 出版.
- NRK/SR/SVT/YLE, 2011, *Nordic Sámi Survey 2011 – Additional report: Media usage among Sámi people in Norway Sweden and Finland*, TNS Gallup- Norway.
- 小内純子, 2010, 「持続可能なコミュニティ FM 放送局経営の可能性～ボランティア型放送局を事例として～」札幌学院大学総合研究所『社会情報』 Vol.20, No.1, 15–34.
- , 2013a, 「サーミ・メディアの展開と現段階」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 29 ノルウェーとスウェーデンのサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 146–62.
- , 2013b, 「アイヌの先住民族メディアの現段階」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 68 –77.
- , 2014, 「アイヌの人々とメディア環境」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 31 伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 71 –82.
- Peterson, C., 2003, "Sámi Culture and Media", *Scandinavian Studies*, Vol.75, No.2, 293 – 300.
- Pietikäinen, S., 2008, “To breathe two airs: Empowering indigenous Sámi media”, in Wilson, P., Stewart, M, eds., *Global Indigenous Media* (Duke university press), 197 – 213.
- Solbakk, J. T., ed./author, 2006, *The Sámi People – A Handbook* (Davvi Girji OS).

インターネット資料

NRK、"NRK Sápmi's history"

http://www.nrk.no/sapmi/om/7._nrk-sapmi_s-history-1.11296957(最終閲覧日 2015年1月17日)

付記

本稿は、2013年度札幌学院大学研究促進奨励金（A）「ノルウェーのサーミ・メディアの展開と現状」(SGU-AS13-192004-11)にもとづく研究成果の一部をなすものである。

(小内 純子)

